

序

電子内視鏡が開発され普及してから20数年が経過し、最近では拡大内視鏡観察やNBIなどの画像強調観察（Image-Enhanced Endoscopy）をルーチンに使用する施設が増加しつつある。小さく平坦な早期胃癌，M1食道表在癌，2 mm以下の超微小癌などの発見・診断が日常診療のなかで行われるようになってきている。

一方，内視鏡治療手技・周辺機器の進歩により，EMRやESDによる治療が，全国的に広がっている。学会のビデオシンポジウム，各地域で行われている内視鏡ライブデモンストレーション，ハンズオンなどは常に盛況で熱気を帯びている。高齢化社会到来の今，低侵襲治療によるQOLの向上が社会的要求として高まるなかで内視鏡治療の適応拡大も積極的に論議されている。しかし，最近，大腸内視鏡の分野と同じように上部の内視鏡でも治療手技の習得のみを目指す若い先生が多く，診断学がやや軽視される傾向にある。EMRやESDの正しい普及と患者の立場に立った治療手技の選択決定のためには正確な診断学を身につける必要があり，深達度，浸潤範囲診断の重要性を再認識すべきである。このような状況をふまえて，本書は，主に消化器専門医を目指す先生方を対象とし，消化器内視鏡診断学をマスターするために必要な入門書として企画編集させていただいた。

前半の第1章，第2章では，解剖学的事項と内視鏡挿入法，疫学とスクリーニング，肉眼分類を概説し，第3章の“術前内視鏡診断”のところでは，最先端の内視鏡診断学について通常内視鏡のみならず，拡大内視鏡診断，NBI，超音波内視鏡診断をとりあげ，第一線でご活躍されている専門家に解説していただいた。さらに第5章“Case Study”では，実際の症例をもとに，鑑別診断，深達度診断，治療法の選択などを分かり易く解説していただいている。本書に書かれている内視鏡診断の基本，コツならびに注意点を熟読吟味され，わがものとして身につけていただきたいと念願するものである。本書の編集を担当した2人の誕生日は偶然8月4日であることが，数年前の研究会で知ることとなり，今回の編集企画をともしするきっかけとなった。新しい時代に向けて変化を期待され2009年1月米国大統領に就任したバラク・オバマ氏もまた同じ誕生日である。本書を読まれる若い先生方がこれからの新しい時代において優れた日本の内視鏡診断学を世界に発信していかれることを期待する。

最後に，大変お忙しいなか快く執筆をお引き受け下さった諸先生方に厚く御礼申し上げますとともに，編集の労をとって下さいました羊土社 嶋田達哉氏，制作担当の溝井レナ氏に感謝申し上げます。

2009年4月

田尻久雄
小山恒男